

## [研究論文]

## 私的言語と『論理哲学論考』

塚原典央

## はじめに

ウィトゲンシュタインの『哲学探求（以下、『探求』あるいはPUと略記する）』の第一部は、長くても2ページ短ければ1行だけの693個の節から構成されている。この本は彼が1936年（47歳）から1945年（56歳）までの間に書き留めた、哲学的考察の「覚え書き」の「アルバム」に他ならない。それは決して体系的な本でもないし、また他人が読むことを前提にして説明したり説得したりするような仕方でも書かれてはいない。読む者にとってあまり親切とは言えない本である。しかしこの『探求』の序に以下のような件がある。

しかし4年前私は、最初の著作を再び読み、そしてその思想を説明するという機会を得た。そしてその際突然、私はあの古い思想と今度の新しい思想を一緒にして出版すべきだ、という新たな思いが私に起こった。というのは、今度の新しい思想は私の古い思想の考え方と対比され、そしてそれを背景にしてのみ正しく理解され得るであろうから。

「私の古い思想」とは、もちろん『論理哲学論考（以下、『論考』あるいはTLPと略記する）』を指している。そして彼は『探求』は『論考』を念頭に置いていないと、正しく理解できないとしている。『探求』は『論考』を批判することで成り立っている、と言ってしまっただけは言い過ぎになるだろうが、少なくとも『論考』は『探求』を理解するための大きなヒントになり得るはずである。

そこで小論では『探求』の「私的言語批判」を、『論考』の言語観と対比させて問題にした。つまり、私的言語は『論考』の言語に属する言語であり、『探求』の私的言語批判は『論考』の言語観に対する批判の一つに他ならない、という視点を取る。そしてこの批判を通して、『探求』の新しい言語観の特徴を浮き彫りにしてみたい。

---

受付日 2008.4.15

受理日 2008.6.5

所属 福井県立大学学術教養センター

## 1:『論考』の言語観

『論考』の言語観を一言で述べれば、『論理的原子論』と『命題の像理論』による言葉の意味の対象説」ということになる。まず論理的原子論は存在論、より精確には世界の成立論である。『論考』においては、世界を構成する最小単位が、単純で、不変であり、そして存在する「対象 (Gegenstand)」とされる。しかし、単にこの諸対象の寄せ集めが世界なのではない。この諸対象が論理的に配列されて原子的事実である「事態 (Sachverhalt)」が成立し、そしてこの諸事態が論理的に配列されて「事実 (Tatsache)」が成立する。さらにこの成立している諸事実の総体が「世界 (Welt)」とされる (TLP1-2・063)。逆に見るならば、世界を分析すると諸事実へ、この事実はさらに分析すると諸事態へ、そしてこの事態をさらに分析すると諸対象へと到ることになる。また、対象が世界の論理的形式を持っているため、存在するすべての諸対象が明らかになれば、それらの諸対象によって成立し得るすべての可能な諸事態が決定され、そして成立し得るすべての可能な諸事態が明らかになれば、成立し得るすべての可能な諸事実が決定され、さらに成立し得るすべての可能な諸事実が明らかになれば、成立し得るすべての可能な世界が決定される。つまり、この対象の持つ世界の論理的形式が世界の論理そのものなのである<sup>1)</sup>。

他方、命題の像理論は、上の形而上学的成立論である論理的原子論と対を成す言語論に他ならない。像理論においては、対象には「名前 (Name)」が、事態には「要素命題 (Elementarsatz)」が、事実には「命題 (Satz)」が、そして世界には「言語 (Sprache)」が対応している。つまり命題は諸要素命題の論理的な配列に分析され、その要素命題は諸名前の論理的な配列に分析される。そしてこの言語における名前が世界における対象と一対一対応している。つまり命題における名前は、事実における対象を「代理」している。この名前と対象が一対一対応することによって、命題は事実と論理的形式を共有することになり、命題は事実の論理的な「像 (Bild)」となっている (TLP2・1-2・21)<sup>2)</sup>。

このような『論考』の言語観においては、言葉の意味として二つのものが規定されている。一つは対象が名前の「意味 (Bedeutung)」とされ (TLP3・203)、もう一つは命題が像として表現しているものが、つまり可能的事実が命題の「意味 (Sinn)」とされている (TLP2・221-2・222)。命題はその要素である諸名前が諸対象と一対一対応するように意味する (bedeuten) ことによって、世界における事実の像となっていることになる。これが『論考』の「意味の対象説」と言われるものである。そして、有意味な命題とは事実と論理的形式を共有する命題、つまり論理的に可能な事実の像になっている命題であり、無意味な命題つまり一見命題のように見えても実はインクの染みに過ぎない命題もどきは、如何なる可能な事実の像にもなっていないものに他ならない。さらに真な命題とは、実際に成立している事実の像になっている命題であり、これに対して有意味ではあるが偽な命題とは、可能な事実ではあるが、現実の世界においては成

## 私的言語と『論理哲学論考』

立してはいない可能な事実の像となっている命題のことである。従って、真であろうと偽であろうと有意味な命題は、すべて可能な事実の像であることになる。そして、可能な事実の像以外に有意味な命題はあり得ない。此処で「事実の像」を「事実の記述」と言い換えれば、『論考』においては言語は可能な事実の記述以外にはあり、ということになる。これを「言語の記述説」と呼ぶことにする。

もう一点「思念 (Gedanke)」について触れておきたい。命題が事実に対する言語記号によって表現された論理的像であるのに対して、われわれが考えた結果得られる心的な論理的像が思念である (TLP3-3・2)。つまり、命題は目で見ることの出来る「文字記号」である名前が対象と一対一対応することによって事実の像となっている。それに対して思念は何らかの心的な構成要素が対象と一対一対応することによって、事実の論理的像となっている。つまり、思念を文字記号で表現したものが命題だ、ということになる。従って、言語と思念は世界が持っている論理を共有しているのであり、世界の論理を共有することによって世界の論理的像となっている。換言すれば、世界の論理的記述となっている。

## 2：私的言語は『論考』の言語

それでは問題の私的言語とはどのような言語なのだろうか。『探求』第一部 243 節においてウィトゲンシュタインはこの私的言語を次のように規定している。「そのような [私的] 言語に含まれている語は、発話者のみが知り得るもの、つまり発話者の直接的で私的な感覚を指し示さなければならない。それゆえ他人はこの言語を理解することができない<sup>3)</sup>」。例えば、私的言語の「痛み」という語の場合を考えてみる。発話者が私であるとするならば、私の「私は歯に痛みがある (私は歯が痛い)」という発話における「痛み (痛い)」は私が私の歯に現に感じている、この痛みの感覚を指している。しかし此処に何の問題があるのだろうか。一見至極当然なことが言われているように見える。「私は歯が痛い」と私が言うとき、嘘をついていたり演技しているのでなければ、私の歯が痛いのであり、痛みは私が私の歯に感じているものである。

問題は、私的言語の感覚語が「発話者のみが知り得る、発話者の直接的で私的な感覚を指し示している」点にある。換言すれば、私的言語において感覚語「痛み」は発話者の痛みの感覚そのものを直接指示している、あるいは、「痛み」という語が痛みの感覚に直接「結合」されていることになる。さらに徹底すれば、私的言語において「痛み」という語は、発話者の痛みの感覚を指示対象としている、あるいは、この「痛み」という名前は痛みの感覚をその対象としている、さらに、この「痛み」という語の意味は発話者の痛みの感覚だ、ということになる。そうであるならば、この私的言語は『論考』において規定された言語にそっくりではないだろうか。

『論考』においては、論理的原子論と対象と名前の一対一対応の原理によって、命題は事実の像とされた。「私は歯に痛みがある」という言明において、「痛み」という名前が私の歯の痛みと対応して、あるいは痛みの感覚を代理することによって、私の歯が痛いという事実の像になっている、その事実を記述している、と考えれば、私的言語は『論考』の言語と一致する<sup>4)</sup>。

『探求』の私的言語批判を展開している場面で、ウィトゲンシュタイン自身『論考』を念頭に置いて論じていると考えられる箇所がある。それは私的言語批判の議論においてかなり重要だと考えられる、第一部 293 節と 304 節の中にある。前者は「ウィトゲンシュタインのかぶと虫」と呼ばれる有名な節の最後の部分で、「もし人が感覚の表現の文法を「対象とその名前」というモデル〔以下、「対象-名前」モデル、と呼ぶことにする〕に従って構成するならば、その対象は関係ないものとして考察から抜け落ちてしまうのである」という箇所である。つまり私的言語においては、感覚の表現の文法が「対象-名前」モデルに従って構成されている。そしてこの「対象-名前」モデルという文法とは、まさに『論考』の規定する言語の文法に他ならない。

後者は、感覚は「何かあるもの (Etwas)」でも「無 (Nichts)」でもないとする、言わば謎の節の最後の部分の、「このようなパラドックスが解消されるのは、言語は常に一定の仕方で働くのだ、換言すれば、言語は常に同じ目的 — 家、痛み、善と悪、その他何であれ思考を伝えるという目的 — に奉仕するのだという考えから、われわれが根源的に決別するときだけである」という箇所である。ここで「常に一定の仕方」でしか働かない言語で、さらに「思考を伝える」という目的しか持たない言語とは、やはり『論考』の言語を指している。『論考』の言語は、事実の像としてしか働かない、言い換えれば世界の記述という働きしか持っていない。そして『論考』の言語は事実の像であり、さらに言語は世界の論理を思念と共に共有することによって、思考の表現になっている。われわれはこの私的言語、そして『論考』の言語から「根源的に決別」しなくてはならない。しかし、骨身に染み込んでしまっている記号と感覚が直接結合されているという思い込み、「対象-名前」モデルという思い込みと決別するのは、そう簡単なことではない。

### 3: 感覚は「かぶと虫」か?

では感覚語についての「対象-名前」モデルの言語つまり私的言語を、問題の「かぶと虫」の節から具体的に考えることにする。

PU I § 293: 私が私自身について、私は私自身の場合からのみ「痛み」という語が何を意味するのかを知るのだ、と云えば、— 私は他人についても同様に〔彼(女)は彼(女)自身の場合からのみ「痛み」という語が何を意味するのかを知るのだ、と〕言わなけれ

ばならないのか。それでは、私はどのようにして一つの場合をそのように無責任に一般化することができるのか。

さて、人はみな自分自身について次のように語る。私は、私自身の痛みからのみ、痛みが何であるのかを知るのだ。— そこで人はみな一つの箱を持っている、としよう。その中にはわれわれが「かぶと虫」と呼ぶあるものが入っている。しかし誰も他人の箱の中を覗くことはできない。そしてみな、自分自身のかぶと虫を見ることによるのみ、かぶと虫が何であるのかを知るのだ、と言うのである。— ここにおいて、人はみな各々の箱の中に異なるものを持っている、ということも可能であろう。いやさらに、箱の中のもの絶え間なく変化している、ということさえ想像可能であろう。— さてしかし、「かぶと虫」という語がこのような人々において〔有効な〕使用を持つとしたらどうであろうか。— そうであるとすれば、それはものの名前としての使用ではない。箱の中ものは言語ゲームにはまったく属していない。さらに何かあるもの (Etwas) としてすら属していない。なぜなら、箱は空っぽですらあり得るから。— いや、箱の中ものを素通りすることによって「短絡させられる」ことができる。箱の中ものは、それが何であっても取り除くことができるのである。

つまり、次のようになる。もし人が感覚の表現の文法を「対象とその名前」というモデルに従って構成するならば、その対象は関係ないものとして考察から抜け落ちてしまうのである。

第1段落の自分自身の場合から「痛み」という語の意味を知るという言語は、もちろん私的言語である。私的言語の場合、私一人だけでなく、他人もその人自身の場合からのみ「痛み」という語の意味を知ることになる。よって各人各様にばらばらに、相互に独立してこの語が何を意味するのかを知ることになる。従って各人の知っている「痛み」の意味は各人各様で、相互に独立している。それにもかかわらず、私が「Aさんは歯が痛い」、「Bさんは腰が痛い」、「Cさんは頭が痛い」と言えば、Aさんの歯の「痛み」も、Bさんの腰の「痛み」も、Cさんの頭の「痛み」もその意味はすべて私の知っている意味、つまり私の痛みの感覚ということになってしまう。どうしてAさんも、Bさんも、そしてCさんも私と同じ痛みを持っていると言えるのか。われわれの間で、痛みの感覚そのものを直接比較することはできない。それゆえ、他人も私と同じ痛みを持っていると、私の場合を他人にも一般化して適用することは「無責任」だ、ということになる。

第2段落の「かぶと虫」は、このような私的言語における私的対象としての感覚の比喩に他ならない。そして、この「箱の中のかぶと虫」と似た話がある。それは、サンテグジュペリの『星の王子さま』の次のような件に出てくる。「ぼく」は王子さまに羊の絵を描くよう頼まれる

のだが、うまく描けず苦し紛れに箱の絵を描いて「これは箱だよ。きみの欲しい羊はこの中に入っているよ」と言う。すると、「驚くなかれ！ 幼い審査員の顔がパッと明るくなったのです。『まさにこんなのが欲しかったのさ。この羊には、草がうんと必要だと思う？』」と王子さまは箱の中の羊について話し始める。この「箱の中の羊」は「箱の中のかぶと虫」と同じだろうか。箱の中の羊を想像して物語を創作するように、箱の中の「かぶと虫」を見ながら話をすることはできないか。もしそうすることができるならば、私的言語は成立することにならないだろうか。

しかし「箱の中の羊」と私的対象である「箱の中のかぶと虫」は異なっている。まず、この箱の中の羊は他人が見ることは出来ないが、羊そのものは自分の場合だけから知っているのではない。みんなと同じ羊を直接見ることが出来る。これに対してかぶと虫の場合は、決してみんなと同じかぶと虫を見ることは出来ない。また他人のかぶと虫は、直接私が見ることは出来ないが、それについてのその人の説明が可能なものであるのでもない。例えば私は見たことがないが、「つちのこ」という生き物と遭遇したことがあると主張している A さんが、私につちのこがどのような生き物だったのか、その大きさ、色艶、形、動き方、鳴き声などを事細かに説明してくれる。信じる信じないは別にして、私は A さんの説明を理解するだろう。私はつちのこが如何なるものであるのか、おおよその見当がつく。そして私は多少なりともつちのこについて話が出来ようになる。例えば私は A さんに、そのつちのこは太さが何cmぐらいかとか、どんな走り方をしたかとか、飛び上がることができたかと質問することができるだろう。しかし、私的対象のかぶと虫はどのような説明も成り立たないのではないか。

むしろ、この点は「かぶと虫」の比喩の限界ではないだろうか。「箱の中のかぶと虫」と言われると、紙箱の中に実際に存在している昆虫のかぶと虫がいる場面を想像してしまう。しかしこの想像は適切なものではない。そして、「箱の中の何か分からないもの」としても上手くいかない。例えば B さんが自分の箱の中の「何か分からないもの」について、色艶、形、動き方などを説明してくれれば、他人もそれについてある程度の理解を持つことができる。先のつちのこと同様に。しかし私的対象は決して他人には理解できないはずではないか。やはり感覚の比喩としてもものを持つてくるのは、無理があるのではないか。この点は私的感覚「E」という議論の方がより直截な議論だと思われる。

#### 4 : 私的感覚「E」

ウィトゲンシュタインは「対象-名前」モデルの例として、私的感覚「E」というものを想定して考察している。

PU I § 258 : 以下のような場合を想像しよう。私にはある [私的] 感覚が繰り返し起こ

## 私的言語と『論理哲学論考』

るので、私はそれを日記につけようと思う。そのため私はその〔私的〕感覚に記号「E」を結合し、そして私はその〔私的〕感覚を持った日にはいつもカレンダーにその記号を書き込む。— ここでまず私は、この記号の定義は語られ得ないということに注目したい。— それでも、私はその定義を私自身に対してならば、一種の直示定義として与えることができる。— どのようにしてか。私はその〔私的〕感覚を指示できるのか。— 確かに、通常の意味においてはできない。けれども私がその記号を口に出して言い、あるいは書き記し、そしてその際私は自分の注意をその〔私的〕感覚に集中する— このようにして私はいわば内的にその〔私的〕感覚を指示するのである。— しかし、何のための儀式か。というのは、そのようなことは儀式としか見えないからである。定義は何であれ記号の意味を確立する。— いやこのことは、まさに注意の集中によって起こる。なぜなら、私はそうすることによってその記号と〔私的〕感覚の結合を自分自身に刻印するから。— 「私は自分自身に刻印する」ということが意味し得るのは、このような出来事が、未来において私がその結合を正しく思い出すようになる、ということではない。しかしこの場合、私はその正しさについての規準を持っていない。ここで人は、まさに私に正しいと思われるものが正しいのだ、と言うかもしれない。そしてこのことは、ここでは「正しい」ということについては語ることはできない、ということの意味するだけなのである。

此処で私的感覚「E」は私が感じるということ以外、如何なる影響も私に及ぼさないものとして想定されている。つまり、痛いときに泣いたり、くすぐったいときにのけぞったり、苦しいときに顔を歪めたりといったことが全くない、私の振る舞いとは一切関係のない、振る舞いからは独立した私的感覚として想定されている。また、「E」は私の身体的状態にも何ら影響を及ぼさない。例えば体温、血圧、血液中の成分の変化を起こすようなこともないし、大脳や神経系に変化をもたらすこともない。つまり「E」という記号は何の媒介もなく直接私の私的感覚と結合されていることになる。従って、私的感覚「E」について、例えば傷を負って出血しているときに感じる「痛み」とか、血圧が急に上昇したときに感じる「頭痛」といった説明を与えることができない。直接語と私的感覚が結合されている以上、「E」という語の意味を規定するものはその私的感覚以外に何もない。よって「E」の定義は「今私が感じているこの私的感覚」、「私がカレンダーに『E』と書き込んだ日に感じた私的感覚」といった所謂、内的な直示定義のみである。

しかし内的な直示定義は本人はさて置くとして、他人にとって如何なる意味を持ち得るだろうか。当然他人は私の私的感覚Eを感じることはできない。他人が捉えることができるのは、私のやっていることと言っていることだけである。他人には、表情一つ変えずに私が「私は今

Eを感じている」と発話していることや、カレンダーのその日の所に「E」と書いていることしか分からない。Eがどのような私的感覚なのか、他人には皆目見当がつかないのである。従って、他人には私の言ったりやったりしていることは、何故そんなことをするのか、何のためにそのようなことを言うのか訳の分からない「儀式」とでもしか言い様のない事になる。

さらに、私自身にしても昨日の私的感覚Eと今感じている私的感覚Eは同じだと、どうして言えるのだろうか。それは私が「まさに注意の集中によって」、「その記号と私的感覚の結合を自分自身に刻印する」事によって「同じEなのだ」とすることができるだろうか。確かに「同じだ」という思いはあるだろう。しかし勘違いは人間の十八番である。自分の思い以外に同じEであることを保証してくれる何かが必要となる。けれども、語「E」と私的感覚Eとが直接結合されている以上、その様な何かはあり得ないのである。

## 5：有効な「かぶと虫」

かぶと虫の話に戻れば、Eもかぶと虫も他人は直接捉えることができないものとして想定されている。この私的対象に直接結合される名前として「E」や「かぶと虫」が考えられている。そして、箱の中身である私的対象は人によって異なっているかもしれないし、また「絶え間なく変化している」かもしれないし、さらに空っぽかもしれない。つまり他人が直接捉えることのできない私的対象について、当然他人は直接問題にすることができない。よって、私的対象を意味とする、あるいは私的対象と直接に語が結合されている私的言語は成立し得ないことになる。換言すれば、私的言語は「私的感覚の表現の文法を『対象とその名前』というモデルに従って構成」したために「その対象は関係ないものとして考察から抜け落ち」てしまったのである。

そこで問題は、「かぶと虫」という語が有効な「使用を持つとしたら、どうだろう」ということになる。言い換えれば、私的言語ではなくわれわれの日常言語において実際有効に使用されている感覚語の文法はどうなっているのか、という問題に他ならない。この点について、まず先の293節から読み取れることは、一つは「かぶと虫」という語はものの名前ではないという点であり、二つ目は箱の中のものつまり私的対象は、「何かあるもの」としてすらこの言語ゲームには属していないという点、あるいは箱の中のものを素通りして「短絡させられる」という点、さらに換言すれば箱の中のものは何であれ「取り除くことができる」という点である。

まずこの有効な「かぶと虫」という語の使用は、物の名前として使用されるのではないとすると、それではどのように使用されるのだろうか。この点については、感覚語例えば「痛み」という語の習得の仕方が問題となる。言葉は学んだようにしか使用できないからである。ウィトゲンシュタインは『探求』第一部244節の中で次のように主張している。

PU I § 244 [部分]：しかし名前とそれによって名づけられたものの結合は、どのように



## 私的言語と『論理哲学論考』

して確立されるのか。この問題は、人間は感覚の名前——例えば「痛み」という語——の意味をどのように学ぶのかという問題と同じである。この問題に答える一つの可能性は、語が感覚の根源的で自然な表出と結合され、そしてその代わりに使われる、というものに他ならない。例えば、ある子供が怪我をして泣き叫ぶ。すると、大人たちはその子供に声をかけ、まず感嘆の表現〔例えば「痛い！」〕を教え、後に文章〔例えば「私は膝小僧が痛い」〕を教える。大人たちはその子供に新しい痛みの振る舞いを教えるのである。

「するとあなたは、「痛み」という語は実は泣き叫びを意味している、というのか。」——とんでもない、痛みの言語的表現は泣き叫びの代わりにするのであって、それを記述しているのではない。

実は、「痛み」という言葉を痛みの感覚という対象の名前として教えることはできない。何故なら、われわれは他人の私的対象を直接問題にすることができないのだから、この場合、大人は子供の痛みそのものを直接捉えてこの言葉を教えることはできないのである。つまり、何時子供が痛みを感じているのか、大人には分からない。よって、大人は子供の痛みを直接指し示して、「それが『痛み』というものだ」と直示定義することはできない。教えようにも教えようのない言語は、言語のように見えたとしても、実は言語ではあり得ない。絵に描いた餅に過ぎないのである。

そうではなく、大人は子供が例えば泣くといった痛みの「根源的で自然な表出」という振る舞いをしている時に、「今度からは泣かないで『痛い』と言おうね」と言って、「痛み」という言葉を教えて行く。大人は子供の振る舞いを軸として、感覚語を教える。つまり「痛い」という語は、まず痛みの表出の代替として痛みの表出と結合される。第一義的には「痛い」は痛みの根源的で自然な表出の言語的代替なのである。これを感覚語の「表出代替説」と呼ぶことにする<sup>5)</sup>。そしてこの表出代替説は「対象-名前」モデルを取っているのでもないし、従って記述説とも異なる。

293 節のもう一つの論点、箱の中のものつまり私的対象は、「何かあるもの」としてすらこの言語ゲームには属していない、それを素通りして「短絡させられる」、さらにそれは「取り除くことができる」という点については、『探求』第一部 304 節との関連が問題となる。

PU I § 304 : 「しかし、それでもあなたは痛みのある痛みの振る舞いと、痛みのない痛みの振る舞いの間には違いがある、ということは認めるだろう。」認めるだろうだって。それよりもっと大きい違いなどあり得るものか。——「それでも君は、繰り返し繰り返して感覚それ自体は無 (Nichts) だという結論に到達しているではないか。」——とんでも

ない。確かに、感覚は何かあるもの (Etwas) ではないが、しかし無 (Nichts) でもない。結論は単に、無 (Nichts) は、それ自体については何も言えない何かあるもの (Etwas) と同じ働きをする、ということである。われわれはここでわれわれに執拗につきまとうであろう文法を拒否したのだ。

このようなパラドックスが解消されるのは、言語は常に一定の仕方で働くのだ、換言すれば、言語は常に同じ目的 — 家、痛み、善と悪、その他何であれ思考を伝えるという目的 — に奉仕するのだという考えから、われわれが根源的に決別するときだけである。

此处で、感覚を「それ自体については何も言えない何かあるもの」という私的対象とするのは勿論私的言語論であり、そして「感覚それ自体は無だという結論に到達」するのは、行動主義に他ならない。では行動主義者は、「痛みのある痛みの振る舞い」と「痛みのない痛みの振る舞い」を区別をすることができるだろうか。行動主義にも様々あるが、「心についての話は、行動の話に還元することが出来る」とする、最も徹底した形態の行動主義を考えるならば、この区別はできない。と言うのは、心的な事柄がすべて完全に行動に還元されるのならば、例え私の場合であっても痛みの振る舞いがあれば、私は「痛い」ことになる。何故なら、感覚そのものが行動に還元されて、言わば無くなってしまいう以上、最終的に残るものは行動 (振る舞い) だけということになる。したがって、そこではそもそも痛みといった感覚は、無いものとして無視され、行動しか問題にならないからである。また行動主義が、「彼(女)は歯が痛い」という言明が真であるための条件を行動に求めているのならば、これも記述説の一つであろう。この言明が彼(女)の一定の行動を記述していることになるからである。

そしてもちろん、痛みの表出代替説は行動主義ではない。まとめれば、「痛み」という語は対象の名前ではない。よって痛みの感覚は何かあるものではない。此处で対象にこだわると、対象が取り除かれてしまったかのように見える。つまり対象が無になったかのように見えてしまう。これはまだ「対象-名前」モデルに、記述説にとらわれている証拠ではないか。ましてや、「何かあるものでも、無でもない痛みとは何か」と問うてしまつては、「対象-名前」モデルそして記述説に逆戻りしてしまうことになる。

## 終わりに

ではわれわれは自分の感覚や気分を説明したり、記録することはできないのだろうか。いやわれわれは日頃当たり前のように、そういったことを行っている。歯医者に行つて「右上の奥から2本目の歯がきりきりと痛い」と訴え、「新しい車を買つて、浮き浮きしている」と日記に記している。日常言語において「感覚」とは何か、とどうしても問いたくなる。

## 私的言語と『論理哲学論考』

この問いに対しては、表出代替説に基づいて「痛みとは痛みの表出がある時に感じているもの」と一応答えることができる。しかしこの答えは、「痛み」という語はまず痛みの表出と結合し、さらにこの表出と私的感覚としての痛みが結合されている、とするものではない。換言すれば、表出を介して二段構えで「痛み」という語と私的感覚が結合されるのではない。つまり、「表出がある時に感じているもの」は私的感覚ではないのである。何故なら、私的感覚は取り除くことができるもの、素通りして短絡させられ得るものである以上、そもそも結合される私的感覚という対象が存在しないかもしれないからに他ならない<sup>6)</sup>。

此処で忘れてはならないことは「言語は常に一定の仕方働く」のではない、「言語は常に同じ目的の奉仕する」のではない、ということである。「痛み」という語の出発点は、記述にあるのではなく、あくまでも表出の代替にある。そしてウィトゲンシュタインは次のようにも述べている。

PU I § 310 : 私がある人に、私は痛みを持っている、と言う。彼の私に対する態度は、その時私は痛みを持っているということを、信じているものであったり、信じていないものであったり、不信を持っているものであったり等々といったものであろう。

彼が「それはそれほど酷くはない」と言ったとしよう。——これは、彼が私の痛みの表出の背後に或るものを信じていることを証明するのではないか。——彼の態度は彼の態度の証明なのである。私の「私は痛みを持っている」という命題だけではなく、彼の「それはそれほど酷くはない」という応答もまた、自然な音や身振りで置き換えられていると考えよ。

徹底して表出代替説を展開する必要がある。記述説から「根源的に決別する」ための道程はまだまだ先が長いようである。

## 注

- 1) 『論考』においては、「世界は成立していることがらの総体である (TLP1)」、そして「世界は事実の総体であり、ものの総体ではない (TLP1・1)」とされている。従って、成立するのではなく、存在する対象は世界の構成要素の最小単位として要請されるもの、あるいは世界を分析した結果最終的に至り着くはずのものではあるが、世界を構成する基礎となるのは対象ではなく事実の方である。そして、対象は単独で存在するのではなく、成立している事態の構成要素としてのみ存在する (TLP2・011、2・0123、2・0141 参照)。
- 2) 対象と同様に、単純記号である名前は、完全に分析された命題を構成するものとして要請

されたものである (TLP3・2-3・3)。

- 3) 引用文中の [ ] 内は、塚原挿入。
- 4) より精確には、「痛み」は一つの対象の名前ではなく、原子的事実である事態に対応する、諸名前の配列である要素命題と考えた方がよいだろう。しかし此处では煩雑さを避けるために、名前と対象の対で考えることにする。
- 5) 感覚語の習得については、拙論「反転スペクトルのパラドックス」参照。
- 6) それ故、表出代替説は所謂「類推説」ではない。類推説は、私が痛いときに行っている振る舞いと同一振る舞いを他人がしている場合には、その人が私と同じ私的感覚を持っていることを「類推」によって知ることができる、とするからである。

文献表 (邦訳のあるものは参照させていただきました。ありがとうございました。)

#### L. Wittgenstein

- ・『論理哲学論考』(TLP、『論考』): *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul, 1922. 邦訳:『論理哲学論考』、坂井秀寿訳、法政大学出版局、1968年;『論理哲学論考』奥 雅博訳、ウイトゲンシュタイン全集1、大修館書店、1975年;黒崎 宏訳・解説、『『論考』『青色本』読解』、産業図書、2001年;野矢茂樹訳、『論理哲学論考』、岩波書店、2003年。
- ・『哲学探求』(PU、『探求』): *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, 1953. 邦訳:『哲学探究』、藤本隆志訳、ウイトゲンシュタイン全集8、大修館書店、1976年;黒崎 宏訳・解説、『ウイトゲンシュタイン『哲学的探求』第I部・読解』、産業図書、1994年。

#### その他

- ・サンテグジュペリ、池澤夏樹訳、『星の王子さま』、集英社文庫、2005年。
- ・塚原典央、「反転スペクトルのパラドックス」、『福井県立大学論集』、第30号、2008年。